

東京バッハ合唱団 月報

[第 732 号] 2023 年 6 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3-47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.732

June 2023

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

会場アンケートでご報告、第 122 回定期演奏会

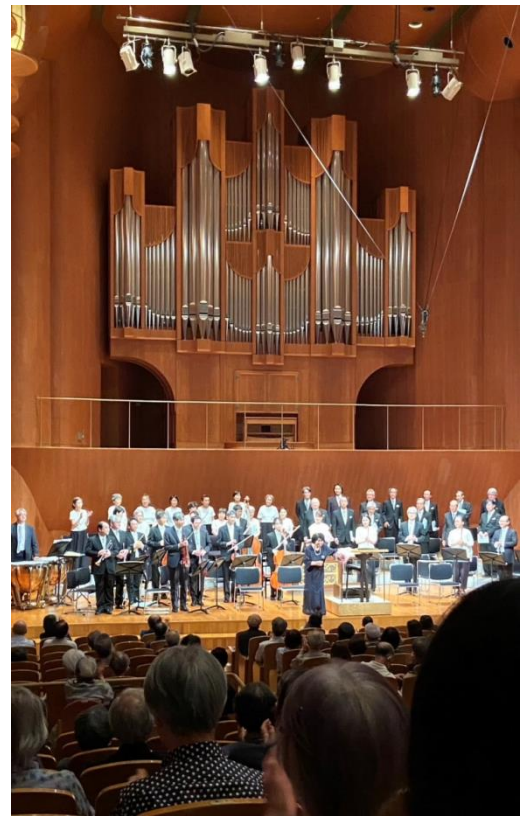
創立 61 年目の新たなステージへ

5 月 6 日 (土)、第 122 回定期演奏会を川口総合文化センター・リリア音楽ホールにて開催。空模様の心配された連休の終盤でしたが、薄曇りの下は汗ばむほどの初夏の陽気で、多くのお客様をお迎えすることができ、お蔭さまで成功裡に終了いたしました。

330 名余のご来場者のうち、63 通のアンケートご回答をいただきました。先ずはお寄せいただいたご回答から、満堂のホールの様子を想像してください。すべてを掲載させていただきたいところですが、熱心でご丁寧な感想が多く、月報紙面がうまってしまいますので、同趣旨のものは割愛させていただきました。会場アンケートにご協力くださった皆さま、心より御礼申し上げます(終了報告・演奏会概要: 3 ページ参照)。

■演奏全般について、ご意見をお聞かせください:

- ・何とも素晴らしい演奏でした。
- ・とても聞きやすかったです。また、いつまでも余韻が残るとも良い演奏会でした。きっと、帰りの沼津までの電車のなかでも、帰宅後も、さわやかな余韻が残ることでしょう。団員の皆さま、ありがとうございます。
- ・心が洗われるような演奏で、癒されました。
- ・大村氏の指揮のもと、皆さんの心が一つになり、素晴らしい演奏でした。
- ・とてもすばらしかった。楽しく味わえました。
- ・期待していた以上に本格的で感服しました。
- ・響きの良いホールが Bach の中核に触れた気がしました。
- ・大村先生、ご立派です。アルトが良かった。ペンテコステ、待ち望み、祈ります。良かった。
- ・まとまった演奏で聴きやすかった。合唱団の方々の年齢は高いので声は大丈夫かと思いましたが、美しい歌声に驚きました。前半のオーボエの独奏の方の音が美しい。
- ・よかったです。久しぶりのライブでした。
- ・団員ですが、今日の演奏会には参加できませんでした。でも、やっぱりバッハの曲は良いですね。これからは出来るだけ練習に参加したいです。
- ・コーラスの音が下がり気味で気になりました。Ob、通底の皆さま、とても素晴らしかったです。
- ・演奏も声楽も美しく調和していて、素晴らしかったです。
- ・生で聞けて、迫力があって大変良かったです。
- ・演奏頻度の少ないバッハのカンタータを、生で聴けることはとても嬉しく、有難いことです。ブルックナーやマーラーも素晴らしいのですが、こちらにももっと目を向けて頂きたいですね。大村マエストロの歩行心配でしたが、指揮は豊かな表現で安心しました。



■全 3 曲の演奏を終えて (写真提供: 費 朝子)

- ・使命感をもって取り組んでいることが伝わる。CD だけでなく実際に目の前で演奏されると、バッハのカンタータの成り立ちが実感できる。
- ・だんだんとバッハの世界に引き込まれていきました。一緒に歌っている気分となりました。
- ・演奏会全体のテーマがいいと思いました。
- ・素晴らしいコンサートに出席させていただきました。2023 年のベストになりそうです。
- ・“皆で歌いましょう” がなくて、少々さびしかったが、アンコールは良かった。男声、特にバスが弱く聞こえた。
- ・いつもより力強い合唱が聞け、よこびでした。
- ・連休の一日、カンタータを聴けて幸せな 1 日でした。
- ・全体的にまとまりがあり、良い。大村恵美子先生お元気でしょうか? 演奏は大変良かったです。
- ・大変良い演奏会でした。世界に光明を与えてくれたひと時でした。

月報 2023 年 6 月号 CONTENTS

- ・第 122 回定期演奏会・会場アンケート回答集…p. 1-3
- ・同上<終了報告>演奏会概要…p. 3
- ・連載: 退屈するのはいそがしい [28] (大野博人) p. 4

- ・オーケストラ、オーボエ、トランペット、チェロ、すばらしかったです。
- ・特にカンタータ 11 番がききごたえがありました。
- ・ARS の華やかな音色が美しく、合唱を引き立て、支えていました。ソリストそれぞれの音色をたっぷり感じられました。
- ・合唱を盛り上げているオーケストラが入った時は、合唱のソプラノパートのボリュームが弱くならないようになるといいのではないのでしょうか。アルトの独唱がすてきでした。
- ・全般的に良かった。特に昇天節オラトリオ《頌めよ 神のみ国》は感動しました。
- ・管楽器の音色と人の歌声が重なり、心身に訴えかけてくるような演奏に、圧倒されました。
- ・すばらしかったです！ 世界観に引きこまれて、色々な感情がこみ上げてきました。
- ・久しぶりに生の演奏と合唱をききました。良かったです。楽しかったです。
- ・すごくきれいで、楽しく聴けました。
- ・コロナ禍後（まだ只中かも知れませんが）の演奏会、久しぶりに聴きました。素晴らしかったです。先生もどうぞお元気で、次回を楽しみにしております。
- ・すばらしかったです。昇天節オラトリオは、長いつきあいの中でも、初めてだと思います。オラトリオは希望とよろこびを感じる事ができて、幸せになります。アンコールで、ソリストが合唱団の中に入って歌うのは大変感動しました。
- ・オケも合唱もソロ（特にアルト、バス）も素晴らしかった。恵美子先生のエネルギッシュな指揮に圧倒されました。
- ・素晴らしかったです。合唱とオーケストラの調和が良かったです。
- ・大村先生の 92 歳の指揮に感動しました。全体を通して、バッハを愛する気持ちがよく伝わって来ました。
- ・今年のアセンション直近にふさわしい、輝かしいオラトリオでした。
- ・BWV 12…アルトのアリア、とても良かったです。BWV 22…バスのアリオソ、とても良かったです。合唱「主のみ言葉を」へと続ける姿勢に共感いたしました。アルトのアリア、信仰よっての歌と受け止めました。感謝でした。バスのレチタティーヴォ、歌詞と音がマッチしてました。昇天節オラトリオ…合唱、タテが合っていてよかったです。伴奏華やか。バスのレチタティーヴォ、信仰よっていた。ソプラノ・アリア、よかったです。お疲れさまでした。コーラル伴奏華やか。ことばをはっきりしてほしい。トランペットに消されてる。
- ・とても良かった。2 時間、バッハの荘厳な雰囲気に入ることができました。特に合唱が良かった。アルトも良かった。



■指揮・大村恵美子（写真提供：パラビジョン）

■とくに、日本語演奏について：

- ・感激いたしました。
- ・日ごろ、日本語の聖書を読んでいることから、日本語歌詞はわかりやすく、また聖書のことばや、イエスさまのおられた風景や弟子たちとのやりとりなどが、想像以上に理解が深まりました。このような点でも、日本語演奏は良かったです。
- ・直接伝わる感じがします。
- ・絶対に外国語より分かるから良い。
- ・バッハの演奏を日本語で聞ける機会は普段ないので、貴重でした。
- ・内容が伝わってきて良いと思います。
- ・ある程度速い曲では、日本語としてよく認識出来て、大いに鑑賞の助けになり、ことばが直接入って来る心地良さがありました。
- ・分りやすい。訳詞、素晴らしい。
- ・プログラムを見て、内容を知りながら聴くことができた。
- ・いつも思うことですが、当時礼拝に参加していたドイツ人の気持ちに、いくらか近づける気がします。
- ・聞いているだけだと言葉がよく聞きとれないこともあるけれど、歌っている日本語の歌詞がプログラムに書いてあるので、良く分かった。
- ・聞きなれないので、やや違和感があります。ドイツ語の発音（子音とか）効果も考えて作曲されていると思うので。
- ・日本語で歌う意味合いについて、小生はあまり共鳴、理解していない。
- ・日本語なので、どこを取り出してもはっきりと意味が理解できるのが安心で、良かったです。
- ・1 曲目は正直、聴き取りにくかったのですが、2 曲目のレチタティーヴォあたりは比較的聞きとれた気がします。西洋音楽の唱法では日本語が乗りにくいので、古くから議論になっているところですね。
- ・聖句が示されていることがはっきり伝わってきて、4 人の福音史家とコーラルの劇的オラトリオ、初めてこのような演奏を聴きました。バッハの教会音楽が強く伝わってきました。日本語演奏だからこそ、と思いました。
- ・“じゅっじーか”など最初ひっかかる。すぐに慣れる。膠着語で語順が自由になる日本語、外国映画の吹き替えをやらせるとうまい日本人の器用さで何とかこなしている。
- ・残念ながら、プログラムの訳なしには理解不能でした。まるでドイツ語で聴いている感じでした。
- ・内容がよく理解できて、良い企画だと思いました。
- ・はじめて聴きました。違和感がありましたが、1 曲目が終わるころにはすっかり聴きほれて、歌詞が理解できることに感謝しました。
- ・日本語演奏は、演奏の内容がはっきり分かり、大賛成です。
- ・内容を知りやすい
- ・日本語演奏も、一語一語はしっかり聴くことができました。
- ・素人リスナー（私のような）にとっては、平坦に語られる訳ではない日本語の歌詞は、外国語同様、多くの部分でうまく聞き取れず、難しいことに変わりはない。大事なことは何を歌っているかをリスナーが理解できるか否かだと思います。リスナーも事前に勉強する必要がありますね。
- ・めったに日本語で演奏する合唱団はないので、長く続けてください。
- ・ことばがもう少し聞きとれるといいな～ と思った。
- ・日本語で歌ってくださって、わかりやすくて良いです。
- ・ことばが分かるので、かしこまらず身近に伝わってくる。
- ・歌う方も聴く方も、今の進めている音楽を理解しやすく、

讚美に直結しますね。とてもすばらしいことだと思います。

- ・日本のいたるところでドイツ語のバッハが演奏されていますので、東京バッハ合唱団の演奏は貴重だと思っています。
- ・日本語は、パンフレットの言葉を聞きとれました。
- ・母語であったため、歌詞の紡ぐ物語を聴きながら理解することができました。
- ・日本語だと、より伝わりやすく、わかりやすいので、感情移入しやすいです。
- ・歌の意味が分かってうれしいです。私もシャンソンの勉強をしています、先生が日本語で歌うことにこだわっています。初めての曲でも楽しめるし、とても良い考え方と思っています。
- ・分かりやすく、良かったです。
- ・日本語で意味が理解できて良いと思います。
- ・少し分かりにくい所（聞き取りにくい）もありましたが、日本語演奏をしていただけるだけで感激です。
- ・イエスの、そしてバッハのメッセージが、そのまま大村先生、合唱団のひとりひとりを通じて直に伝わるのが、とても意義あることと思っています。大村先生からは全身全霊で伝わってきました！
- ・日本語歌詞と楽曲がピッタリと合っていました。
- ・ダイレクトに主のみことばが、聖書の場景が伝わります。初めてでした。
- ・大変良く訳されており、内容がよく伝わってきました。
- ・バッハは、なじみの少ない作曲家で、難しいイメージから、どこか避けているところがありました。バッハの音楽への入り口として、日本語（母国語）での演奏はとても有意義であると思いました。演奏者のみなさまにとっても、ドイツ語よりも日本語のほうが解釈しやすいのでは！ と思いました。
- ・とくに日本語がいいという感じは受けなかった。ドイツ語のままでもいいと思う。
- ・40年以上前、コラールなど少し日本語で歌って以来の日本語バッハでした。有意義な試みで、全国各地で日本語のバッハ、ヘンデル、メンデルスゾーンが歌われると良いと思います。
- ・日本語なのに、歌詞が何を言っているのか聴き取れなかった。
- ・説明と解説を読み、日本語訳をみながら聞いていると、聖書を音楽付きで読んでいるような気になり、恵まれました。もし、分からないドイツ語のような言葉だったら、飽きたかもしれません。

■その他、本日の運営全般、会場等について、何でも：

- ・大村先生に最高の讃辞を捧げます。
- ・音楽専用ホールであるので、ここで良かった（正解）でした。
- ・指揮台が高く、危険に感じました。
- ・指定席にしてほしい。4Fと書いてほしい。
- ・リア音楽ホール、素敵なおホールだと思った。パイプオルガンを聴いてみたかった。
- ・ちょうど良い休憩が入り、ホールも美しい。
- ・初めてのホールだが、会場全体がすべて木材で囲まれていて、落ち着ける感じで良いと思った。正面に大きなパイプオルガンがあり、次に来たときにはこの演奏が聞きたいと思いました。
- ・指揮の大村さんのおみ足が御不自由のように見受けられましたが、最後まで立派に指揮なさって、感服いたしました。
- ・プログラムが良かったです。

◆月報バックナンバーは、当団HPからご覧いただけます。
http://bachchor-tokyo.jp/monthly_newsletter/index.htm

< 終了報告 >

第 122 回定期演奏会

日時：2023年5月6日（土）14:00 開演

会場：川口リア音楽ホール

曲目：

カンタータ第12番《泣き 歎き 憂い 迷い》

カンタータ第22番《イエス 十二弟子呼びびて言いたもう》

昇天節オラトリオ《頌めよ 神のみ国》

演奏：

光野孝子(S)、谷地畝晶子(A)、鳥海寮(T)、小藤洋平(B)

管弦楽：A R S (コレギウム・アルモニア・スペリオーレ・ジャパン)

オルガン：田尻明葉、合唱：東京バッハ合唱団

指揮/訳詞：大村恵美子

出演者：45名

独唱4名、合唱27名 (S. 6、A. 8、T. 6、B. 7)

管弦楽16名 (管9 [Timp含む]、弦7)

他2名 (Org. 1、Cond. 1)

入場者数：331名

チケット：275名 (内、ぶらあぼ招待36)

招待状：56名 (内訳下記)

(後援会員25、団友8、川口周辺教会16、広告出稿7)

- ・足の悪い高齢者も、駅から直通で来られるホールは好都合だろう。天井は高いし、オルガンも備わって教会の感じがあって、適する。
- ・響きが良く、中規模の会場で聴きやすい。
- ・各パートが少ない中で良くまとまっており、このホールの規模にマッチして、後方でも聞きやすかった。
- ・駅の真ん前という良き立地条件の場所で、感謝でした。
- ・皆様元気なご様子、安心して鑑賞できます。
- ・会場は駅に至近のところにあり、便利この上もない。ホールの音響良く、内装デザイン素晴らしく、正面のパイプオルガンが荘厳な気品を醸し出している。
- ・教会で聞きたいですね。
- ・とてもよい、音がきれいに聞こえる。
- ・すばらしいパイプオルガンがあるホールなので、パイプオルガンの音色の入った合唱も聞きたかったです。小布施町(信州)での演奏会を楽しみにしています。
- ・運営も良かったです。会場の周りの写真や絵の展示も楽しめた。
- ・永くつづけてほしい！
- ・とてもすてきな会場で、スムーズに入場できて、よかったです。
- ・ゆったりと聴かせて頂きました。気持ち良いホールです。
- ・席を選べたのが良かったです。
- ・初めての会場でしたが、ちょうど良い大きさのように思いました。とても良かったです。
- ・会場が駅の近くで来やすかったです。川口って便利なところなんですね、びっくり。マスクが取れて良かったです！
- ・入口のチケット引き換えがもう少しスムーズだと良いと思いました。
- ・説明文章がわかり易くよかったです。会場の明るさが丁度よく、パンフレットの説明を見ながら演奏を聴くことが出来た。
- ・関東在住ではない人間にとっても、わかりやすいアクセスのホールで、ありがたかったです。
- ・次回、今後の演奏、期待しています。

以上

本が資源ゴミになる？

安曇野閑人 大野 博人

貴重な本が次々と資源ゴミになりつつあるのかも…

悪夢のような話を、安曇野の拙宅に遊びに来てくれた文学研究者から聞いた。東大などでフランス文学や思想を講じてきた人だ。名誉教授となった今、心をいためているのが蔵書の行方だという。長年、研究のために集めた和洋の書籍は「家の中であふれている」。入手がむずかしい貴重な古書も少なくない。

80代になり、蔵書を将来世代の研究の役に立てる場所に移したい、と願っている。けれどもそれが容易ではないという。大学に寄贈しようとしても歓迎してもらえないのだ。蔵書に価値がないからではない。大学図書館の予算が限られているからだ。

たくさんの蔵書を受け入れるには、その目録作成などに費用がかかる。それがない。本を寄贈しようとする、その整理のためのお金もいっしょに出してほしいと条件を付けられるのだという。

「高齢の研究者はみんな頭を抱えていますよ。私より、もっと貴重な本をたくさん持っている研究者も同じような問題に直面している」と話してくれた。深刻な事態がじわじわと広がっているようだ。

古書店などが引き取ったとしても、体系的に集められた書籍が散逸してしまう恐れがある。引き取り手がなければ資源ゴミになってしまいかねない。いや、すでにどンドンなっているかもしれない。

外国の文学や哲学がすぐになにかの役に立つわけ

ではない。だとしても、人間や社会について考える視点の豊かな源の一つにちがいない。ゆっくりと時間をかけながら、私たちの日々をうるおしてくれる。それを支える土台が崩れつつあるのか。

そんな暗い気持ちに追い打ちをかけたのが、先日のニュース。日本を代表する研究機関の理化学研究所で今春、研究者や技術職員 97 人が「雇い止め」になったのだという。有期雇用は 10 年まで。それを超えると無期雇用にしなければならない。財政的に余裕がないので、勤務が 10 年を超えそうな人たちを次々退場させたというわけだ。憂き目にあった中には、研究チームのリーダーだった人もいるし、国際的に活躍していた人もいるというから驚く。そもそも理研の研究職職員の 8 割が有期雇用だそうだ。

やれやれ。文系でも理系でも射程の長い研究はないがしろにされつつあるみたい。

こんなことでは、日本の研究レベルが下がる、ほかの国に追い越される、と政治の責任を問う声があがるのは当然だろう。しかし、問題の根はもっと深いように思う。

ノーベル賞の取材をしたことが何度かある。いちばん読まれるのは「日本人が受賞するかどうか、何人受賞するか」についての記事だった。米国国籍の受賞者でも出身が日本であれば、日本人に数える。まるで五輪のメダル数のように、国別の受賞者の数ばかりが注目される。

ノーベル賞委員会に、国別の受賞者数を尋ねてみたことがある。「私たちは、受賞者を国別に分類していません。だからわかりません」という答えが返ってきた。ごもつとも。

受賞者たちが追い求めたのは普遍的な真理。母国の評判ではない。それに、たとえば米国の受賞者といっても、実際にはさまざまな国で生まれた人が含まれる。国別の分類にはなんの意味もない。

その一方で、受賞者たちがどんな科学的研究をしたか、どんな文学作品を書いたのか。それを記事に書いても、受賞者が日本人でなければあまり読まれなかった。ノーベル賞への関心の焦点は「普遍的な真理」ではないように見えた。

国民の注目が集まりにくいところに政治は冷たい。

貴重な本を資源ゴミにし、大量の研究者を雇い止めにする社会が、ノーベル賞受賞者は増やしたいと願う。無理な話だ。

(団友・後援会員、元朝日新聞記者)



■記者稼業を続けると、本もけっこうたまってしまった。貴重な本はあまりないけれど資源ゴミになるかもと思うと切ない。

(写真提供と説明：筆者)

[編集後記]

・前回定演(昨年5月、杉並公会堂)は、創立60周年記念、選曲(BWV 1, 21, 147)の妙もあって、感慨深く充実した音楽会でした。が、コロナ騒ぎのなか、多くの方にとっても、どこか、中くらいの目出度さ、といったところだったのでは?(あくまでも「個人の感想」)

・やっと、目出度さ全開のうちに、今定演を終えました。ご来場のみなさま、こころより感謝申し上げます(K)。